

三月和蘭甲必丹の如く江戸参府して將軍に謁見し貢物を上り

和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸
○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸
○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸

京都銀座人中根支右衛門召れて江戸に至り將軍の下問に對し曆道の真理を上言す

大石門前口に漢字の曆道の真理を説き書ふは多く御書の中より其論の真を許すはすべし御教の與らざる書物と
○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸
○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸

吉宗將軍親製の測午儀を献上死す置く又享保尺を定む

○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸
○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸

長崎地役人西川如見天文著書ありて吉宗將軍其所説を聞かんと七月盧草社と共日江戸に召れ下問あり賞賜ありて帰せり

○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸
○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸

十月東音譜一新井白石撰

○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸
○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸

長崎奉行へ御禁書の中西洋説なりとも御法教化の記事ありて了書物も自今御構無之

○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸
○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸

三月野呂元文採集御用の内命を授け江戸に至り同僚舟羽正伯と俱に諸國を采取す

○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸
○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸

四十二國人物圖説 西川如見撰

○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸
○和蘭船の長崎に来りて者往來一定の敷かりしが本年改一年二隻より一社二人船改五月末二月初六日大坂着岸

六月浦賀奉行置き江戸内海出入の船舶を檢督せしむ又長崎日武具庫を築き銃砲百門具備せしむ

八月江戸白山の築園を設け東西各種植物を栽培せしむ阿部友之進を築園之

吉宗將軍の築園は外國の植物を栽培し其の内に食料植物を置き養生所に置き福助は十八年其間沈く東西の藥物を研究し之を記し後江戸に留り本草學を教授す此の時本草の書より本草通串の書と卷の文と進乃上書して藥物の量名を別し述小將軍一見直の著し築園の事とす

七月尾張藩士近松彦之進近松彦之進は近松藩の藩士火技要録を著す

野呂元丈北國採藥して北陸方物を著す野呂元丈は北國の藩士

十二月丹波藩山藩士萬尾六兵衛規矩分等集を著す

命等者山田國瑞高橋藩士萬尾六兵衛之規矩分等集は其の内に食料植物の栽培法を記す

和蘭人の命ありて西洋産の馬を致ししむ

阿部將翁等關東諸州採藥明年野呂元文等伊豆七島採藥

野呂元文は長崎藩の藩士

二月和蘭人必丹例参桂川南苑新令せしめ和蘭人と對話す南苑は長崎の遊園

五月朔長崎に於て夏至日午の表影を實測す表本八丈二寸八分

享保十年己巳

筑後守從五位下源公之墓 明治己酉四月新井白石邸居の時野山に墓誌あり先指上石二枚其一此十一字と刻す

紀伊藩大砲役佐々木勘三郎成江ア子召され鎌倉海濱に於て大砲丁火矢を放射す

八月和蘭人より椰子樹苗並に藥草十八種を長崎に渡し來り是を江戸に送致せし物白山和蘭人に注文せし西洋産馬五匹并に取者ケイゾル來り九月幕府より御用馬之儀御寄條々として十五箇條の質問書之長崎に送付すケイゾル答詞大通詞今村市兵衛和解以上

同十一月丙午

四月和蘭駟者ケイゾル甲必丹例參り隨て江戸に來り

文那天學者柏文野所撰曆算全書相載す長崎奉行より幕府に進献す

十月桂川甫筑河蘭砲藥品の製煉を令せり

新井元敏十五

同二十年丁未

測量秘書 細井庸澤撰

紅毛火術 續前 廣澤名知儀撰次郎大夫達江人能達士以下世に傳へたる珠の天文地理の學子通少書を長崎の向井元成盛等抄の

同三十年壬申

規矩神術二士箇條 河原貞賴撰

分度餘術 松宮俊仍撰 從前名親子寛山在江戸御着りて其名儀註し其位不規矩術之爲一八七後年より所記し此書を作ら多

向井元敏十五

一七二八

西巳年四十保享

四月和蘭人より留守布流と云ふ器物之纂府に献す細く録長は六尺許の端々五斗状とす
 而論實抄工所製作可謂奇器也大尉命工製之取江戶西御所又五丁獄令開聲音遊技如製序音之則不可得言一瞬息間辨其聲後
 軍用一缺不可無此也此器の名稱及製造法を記してツクワラい、吟以、辨字所用器具、之、字、之、た、り、根、文、信、の、至、清、整、和、合、人、
 軍用一缺不可無此也此器の名稱及製造法を記してツクワラい、吟以、辨字所用器具、之、字、之、た、り、根、文、信、の、至、清、整、和、合、人、
 九月和蘭取者ケイヌル又江戸に召され清御殿にて馬の調取を命せり通訓今村市兵衛
 騎法療法の書を和解すべしとの命あり所蘭於馬書十五卷也○蘭書翻譯此書を最見すべし
 中根法軸舟楫之要父元圭三代て將軍下問に對し關方盈胸と作じ是月見東日記納音軸
 大坂等士大島喜侍より教學九章の傳を播磨門人平野養甫に授く養甫名廉徳
 方田粟布衣全少原高均新島脚方野九章なり○善作祿番右衛門守兼中根元圭、高身より教學て其自習す○所て諸
 國を巡遊して其津和島橋本野波吉門人甚多し家傳相傳して大島法算術と云ふ小文書傳授す
 長崎人西川忠次郎正和見の子なり家學を修め江戸に出て、呈層學を教授す此年天經或
 問に訓點を施して開版す明年又天文名目抄を刊行す
天經或問は天文書として清の世に傳はり四年蘭明書目此集於天道運行管段も問答一紙其詳以然物有誤致其不誤占驗也
 為精説い見の

西巳年四十保享
大坂等士大島喜侍
長崎人西川忠次郎

一七二九

戊辰年五十同

三月吉原將軍於城内朝鮮馬場親しく蘭人ケイヌルの家馬術を覽じ
 其馬ハルレヤ蓋毛ビヤクテ鹿毛なり程を由量してこれより馬度齊備左右衛門ノ命より其術を學ばしむる
 ケイヌル市兵衛並に管轄より長崎口にて○市兵衛を以て和蘭法算術
 長崎奉行して和蘭人コビイドロ、サラサ、牛酪等の製法藥法を申告せしむ

一七三〇

亥年六十同

三月和蘭甲必丹例參醫官丹羽正伯とて物産の事と詢問せしむ
 其出の名をコレインニルと申す答へたり
 江戸醫人後藤梨香物品目錄後編を作り和蘭の動植物子及小
梨香は生類本邦子相和蘭其父を渡り本邦に來り其父を和蘭語に傳へて其物品目錄を作り其後編を作り其父を和蘭語に傳へて其物品目錄を作り其後編を作り
 尾張士人佐枝平宜録砲茶語を著し利器の當否を論す
伊豆編成之邊長治流軍學者なり當時伊豆の邊に砲臺あり佐枝其後編にして江戸に出で軍醫を就けたり

一七三一

壬子年七十同

五月中根元圭奉命江戸下田西地に於て日出の時差を測定す
元圭及び以來四十八年官軍將軍の日出の時差を測定す一人は其子也元圭の七十一歳ふりと燒し
 一、元圭、當らむ元圭奉命を授け、下田の南島に測量す一人は其子也元圭の七十一歳ふりと燒し
 量地指南 伊勢人村井大輔撰名目録江ノ東の地を測して測量所を設けたり
測量定規洋貨等を用いて親自録日記編一紙毛傳本所ノ初問、レ中曾正統説り龜嶽と云ふ所より又嶺行、要用を述べて後編と
 量地又豐隆元法正等十冊の寶永中なり

一七三二

享保十八年五月

正月曆筭全書訓譯告成中根元圭奉命以英八年

建部賢弘著一曰(曆筭全書)西洋曆法有年算三角法測圖八線諸法軍伍丙午海御番表以算元通曆命故之臣

中根元圭

一七三三

同十九年甲寅

五月江戸人島田運矩規矩元法町見辨疑主著各術一問答子託諸器の用を示す

島田運矩

一七三四

同十二年乙卯

江戸人青木文藏所著養蕃考吉宗將軍の親覽す了所となり二月命あり上木一廿月日頒

青木文藏

一七三五

元文元年辰

三月猪飼重次郎為天文方

猪飼重次

一七三六

元文

長崎大通詞名村八右衛門通詞目付

名村八右衛門

元文

六日

十二月紅毛天地二圖覽説 長崎天文者北島見信撰 上卷圖説 下卷不傳
五(一)傳生アリテ朝鮮天地二圖覽説ト云ヘク書ヲ著シテ第二卷ト云ク此卷而云ク力ニ因リテ開クト云ク有テ九ナリ

幕府新ニ大筒役士置キ鐵砲方井上氏ノ世職トシテ隔年鎌倉由井濱日於テ大砲發射ノ儀
留之 行ハ一ハ又江戸近郊ニ於テ將軍親閱ヲ供テ了事トアリ 井上氏前出ツ
見信ハ長崎地誌ニ載ル所ニ據リテ實年頃ノ御儀ヲ詳述スル所ニ據リテ試シテ之ニ全ク適合スル所ニ據リテ其後鎌倉由井濱ノ儀ト云フ
本書ノ身任者係ル所ニ據リテ實年頃ノ御儀ヲ詳述スル所ニ據リテ試シテ之ニ全ク適合スル所ニ據リテ其後鎌倉由井濱ノ儀ト云フ

三月八日 浪人備者 青木文藏 貞吉子文
右學問宜敷自今編集之書物其外古書之取出版度及差上之自今自右ノ筋御用可相勤立依之十人扶持被下御留寺居
丈配申行保役名御書物御用達 浪人備者 青木文藏 貞吉子文
十月朔日 町醫師 野呂元丈 貞吉子文
醫術本草ノ精ニ相聞(御目見被仰付候間)朔日五時海城(露出候様)右近將監殿被仰渡候
右西條共ノ江戸町奉行上ノ達アリト云フ此二人ハ洋學開導ノ先達也此儀(著書)刊行ヨリ五年ノ以テ達山ニ被仰用ナリ
二十年ノ間ニ是ノ書物ヲ用テ二人ハ(著書)刊行ヨリ五年ノ以テ達山ニ被仰用ナリ
二十一年ノ間ニ是ノ書物ヲ用テ二人ハ(著書)刊行ヨリ五年ノ以テ達山ニ被仰用ナリ

青木文藏野呂元丈將軍内旨ニ傳テ和蘭文辭ヲ學習セ一ハ
昔宗將軍嘗テ和蘭天文書ヲ見テ其間數語ヲ知リ人ト欲テ了スル所アリ其間數語ヲ知リ人ト欲テ了スル所アリ
其間數語ヲ知リ人ト欲テ了スル所アリ其間數語ヲ知リ人ト欲テ了スル所アリ
其間數語ヲ知リ人ト欲テ了スル所アリ其間數語ヲ知リ人ト欲テ了スル所アリ

十一月西川忠次郎ノ翠乃レ徳川家人トナリ青木文藏と同ジク寺社奉行支配 十人扶持下場
明年和蘭人ヨリ水流石ニ被上テ兩名又ナリ
是年和蘭人ヨリ水流石ニ被上テ兩名又ナリ
是年和蘭人ヨリ水流石ニ被上テ兩名又ナリ
是年和蘭人ヨリ水流石ニ被上テ兩名又ナリ